た題材を、最古の玉垣に雑然と彫りつけて、その裝飾した禮拜所の特殊な宗教的性質にかゝはらなかつたのが始めである。然るに不幸にして、之等の玉垣は木材を以てした上に、印度の乾濕交互する氣候では、之は夙に失はれて了つた。石材の玉垣で今日に遺つてゐる最も古い例、卽ちサーンチー第二塔では、猶ほ此種の面影を見るのである。

此の古い遺物は今日まで出版せられた事もなく、且つ自身も手許に寫眞のない事は、實に遺憾であるが、此の小塔を日々長い間廻つて見たのであるから、記憶を辿つて之を說明し得ると思はれる。其柱の外側面では絕對に、蓮以外を認めず、內側面に至つても、あらゆる題材は、明かに佛敎的の題材であらうと無からうと、凡て殆んど常に蓮花の中に現はしてある。かく限りのない蓮花が、その花瓣の菊形で圓形面を造つてゐるのを見ると、多くの浮彫が、古い柱では凡て圓い形になつてゐるのはこの蓮に依つたのではないかと思はれる。殊に、玉垣の竪材と横材との交叉點では、方形にした方が寧ろ自然なのを殊更圓形としてゐる。然し、之だけの說明や想像では、十分とはい